



こんな映画を観てきた

ステイキング

1973 米

監督: ジョージ・ロイ・ヒル

★ポール・ニューマン

★ロバート・レッドフォード

列車の中でのポーカー勝負、いかさまを逆手にとって大きな“騙し”のスタートだ。その昔、映画館に入り浸るようになったきっかけの記念すべき？作品である。

昭和の“沁みる”唄

雨に咲く花

作詞: 高橋掬太郎

作曲: 池田不二男

唄: 井上ひろし

およぼぬことと

あきらめました

ただど恋しいあの人よ

ままになるなら 今一度

ひと目だけでも

逢いたいの

10.April.2021

Vol.23

お楽しみはこれからだ 4月は『勿忘草（わすれなぐさ）』

YAH!

ヤー！ YOU AIN'T HEARD NOTHIN' YET!

流れのブルース

“全国縦断型”のご当地ソングである。「金沢・主計町」が目新しい他はなじみ深い場所ばかりではあるが、曲調も重くなく、覚えやすく唄いやすい…かも。森進一の物の中でもビッグヒットとはならなかった唄に、時を越えて“沁みる”唄を再発見している（年のせいだとは思う）。

作詞 安富 庚午

作曲 城 美好

唄 森 進一

川の流れの きまぐれに

逃げて行きます 幸せも

こぼす涙が あと追うばかり

流れ流れの 釧路 札幌雪の町

『人を恋うる歌』、『女心』、『雨の棧橋』、『東京みなと』、『放浪船(さすらいぶね)』等など、令和の時代に、深夜、YouTubeでイヤホン越しにしんみり聴き入っている姿は我ながら珍妙で、いささか納まりが悪いところだが、それもまた愉しからずや…である。

我慢の限界と無法地帯

人がもう少し(少しでよいと思う…)人に対して優しくあれば、命よりも目の欲求を満たすべく安易な行動をとったり、決して自分発信ではない“言い訳”を並べて自分だけを正当化しようとしていたり、また、誹謗、中傷、押し付け、蔑視、などなど、決して愉快ではない光景や言葉の大半は失せるに違いない。

絵に描いたような“善人”である必要はない(それもちょっと気味が悪い)、それが人としての“余裕”という程度のもので構わないだろう、そのささやかな優しさの

交わりが、きっと諸々の問題のかなりの数を解決することだろう(ゼロになることを願うが、それは無理というものだろうし、その必要もあるまい)。我慢をしない誰かの真似をして、自分だけが悪いのではないとばかりに開き直る姿は浅ましくもみっともない…と言わざるを得ない。それは本当に我慢をしている多数(そうであつて欲しい)の人が持つ“思い”に失礼極まりないことであつて、人として持つべき“情け”のかけらも見出せない。